様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２００７９

研究課題名（和文）草月アートセンターの網羅的な資料体編成に向けた「アーカイヴ型」研究

研究課題名（英文）An "archival" approach to the Sogetsu Art Center materials (c.1958-1971)

研究代表者
上崎　千（Uesaki, Sen）

慶應義塾大学・アート・センター・講師

研究者番号：５０５９９４６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,300,000円、（間接経費）　990,000円

研究成果の概要（和文）：旧草月会館ホール（赤坂）を拠点に「前衛」の実験場・発信基地となった草月アートセンター（c.1958～71年）の計305催事について、残された資料群の非選択的な調査・研究を実施した。研究プロセスそのものが「アーカイヴ」の似姿をとる本研究の成果として、催事毎の単位で編成された物理的資料体と総目録（計4582アイテム）、催事毎に集積された関連文献情報（計2147レコード）、「前衛」を網羅的に扱うデータベースの論理的構造（スキーマ）の設計案などが挙げられる。またニューヨーク近代美術館との連携により、本研究において作成された各種レコード、催事印刷物（エフェメラ類）のデジタル画像のウェブ公開が実現された。

研究成果の概要（英文）：This research project has been proceeded as a non-selective investigation into a great heap of historical materials associated with approximately 300 events held at Sogetsu Art Center, Tokyo (c.1958-1971), the outstanding organization which has once played an experiment station and a radical transmission for its contemporary movements, the aspects of the 60's avant-garde in Japan. The achievement of the research process which can be analogized as the "archival practices" is as follows: a whole list of the physical material corpus (4,852 items, now in Keio University Art Center), an event-based bibliographical data (2,147 records) and the basic design of a logical structure (metadata schema) for the possible database which documents individual subjects in each event. Also the whole view of event-based printed matter (748 printed ephemera) issued from/around Sogetsu has become digitally accessible in collaboration with The Museum of Modern Art, New York.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：アーカイヴ　草月アートセンター　前衛　印刷物　エフェメラ　データベース　ミュージアム

１．研究開始当初の背景
本研究は戦後日本の前衛芸術に関する歴史的検証・再検証の潮流を受け、1960 年代を通して「前衛」の実験場という役割を担い、ジャンル横断的な表現の最先端を発信した拠点、その先駆的事例として近年、国際的な注目を集めている草月アートセンターの活動（C.1958-1971 年）をその対象としている。同センターは「インターメディア」の草創期に勅使河原宏（1927-2001 年）をディレクターとして活動を展開した組織であり、1958 年に開館した草月会館ホールを主な舞台として戦後日本の「前衛」を牽引した。芸術家が主体的に集い、表現や相互批評を行う場として当時の芸術界に多大な影響を与え、そこから多様なコラボレーションが生まれたが、人的・媒体的に複合的なこの時代の「前衛」の在り方は、歴史研究における人物や作品という単位での芸術の扱いを極めて困難なものにしている。芸術研究のメソドロジーに関するこのような現状を受け、本研究はそのような「前衛」の複合的な質への取り組みを今日における「アーカイヴ的」アプローチの一つとして捉えている。本研究の出発点は、慶應義塾大学アート・センターが一般財団法人草月会から長期寄託を受けているマテリアル群である。

２．研究の目的
本研究は草月会館（赤坂）に残されたマテリアル群の調査・分析・分類から出発し、国内外における同時代の批評や受容を含めたさらなる資料収集・分析、及び全資料のデータベース化を課題とし、取捨選択のない網羅的な資料体の編成プロセスを通じて高度な歴史的検証・再検証のための条件を整え、国際的な関心を具体的な研究需要へと繋ぐ情報発信のためのインターフェイスの設計・構築・公開をその目的とする。各種印刷物（エフェメラ）の扱い等、「アーカイヴ型」の研究における方法論的な課題を踏まえつつ、今日の人文学・芸術学の諸領域においてアーカイヴ化が望まれている様々な研究資源に対し、応用可能な作業モデルの提示へと研究を進めていく。

３．研究の方法
（1）物理的プロセス：対象となるマテリアル群（アイテム群）の分析・分類を慶應義塾大学アート・センター内のアーカイヴ施設にて実施。各種アイテムを出来事＝催事単位でグループ化し、必要に応じて保全処理を施しつつ、クロノロジカルに配列する。

（2）全催事の一覧表とアイテム総目録の作成：先行研究や二次資料を参照し、草月アートセンターで行われた全催事（本研究を通して確認される全催事）の一覧表を作成する。またこの一覧表に準拠し、アイテム群の総目録を作成する。

（3）全アイテムのデジタル・イメージ化：催事印刷物（エフェメラ類）を中心にデジタル化を行い、ポスターのような大型アイテムついては専門機関の協力のもとで撮影を実施する。

（4）資料の二次的調査・収集（フィールド・ワーク）：散逸しているマテリアルの所在調査・収集・分析・分類・データ化を実施。国内外の各種研究機関が所蔵する資料、及び個人所蔵資料へのアクセス、関係者への聞き取り調査を実施。

（5）草月会館内に残されているその他の資料の調査・分析・分類：書簡、記録写真、フィルム、音源等に関する調査と、催事一覧表のリソースとの照合。

（6）データベースの設計・構築：個々のリソースの深度よりも網羅性を優先し、簡易データ、基本データ、詳細データ、追加データの計 4 つのデータ階層を、段階的に充填する。アイテムの所在が確認されていない催事に関しても、二次資料等から可能な限りメタデータを採取する。

（7）「アーカイヴ型」の研究における海外での事例を調査：Smithsonian Institution (Archives of American Art), MoMA Archives ほかを訪問調査。同時代の「前衛」をアーカイヴとして扱う各種研機関を訪問し、物理的資料体の編成プロセスや、データベースの構築プロセスにおける技術面での情報交換を可能な限り行う。

（8）インターネットによる情報発信：全ての情報を整えた上での発信ではなく、然るべき情報の獲得を想定しつつ、空所を含んだままの情報の、段階的なリリースを実施する。また、物理的資料体に関しては編成プロセスの段階から第三者のアクセスを極力受け入れ、国内外の研究者の関心を集めることにより、本研究の周辺に研究者のコミュニティを形成する。

４．研究成果
（1）本研究では、各種マテリアルに関する網羅的・非選択的な研究、すなわち「アーカイヴ型」の研究という問題設定のもとで各種プロセスが実施された。また「アーカイヴ型」の研究の手法としてのモデル化も同時に図られ、他の「前衛」の事例、他のマテリアルへの本研究の応用可能性が探られた。非ミュージアム的な知の在り方の可能性を模索しつつ、研究プロセスそのものが「アーカイヴ」という営みとの似姿をとるための可能性の諸条件を整えるプロセスとして進められた本研究の具体的成果として、①催事毎にクロノロジカルに編成され、すでに広く利用可能

な状態となっている物理的資料体（計 4582 アイテム）及び同資料体の総目録、②催事/作品/人的要素の三つ階層によるレコード群＝「前衛」を扱うデータベースのモデル、③催事毎に集積された関連文献情報（計 2147 レコード）を上げることができる。また 2012 年度末より、ニューヨーク近代美術館・国際プログラムとの連携により、本研究において作成された各種レコードと、催事印刷物（エフェメラ類）のデジタル画像の一般公開が実現されている。

（2）本研究がマテリアル群の資料体としての体裁を整えるプロセス（資料へのアクセス可能性を用意するプロセス）を優先的に実施した結果、当初の想定通り、草月アートセンターで行われた各種催事に関心を持つ国内外の研究者のアーカイヴとしての受け入れ態勢を早期に実現することができた。パフォーマンス、造形芸術、音楽、映画、アニメーション、詩、グラフィック・デザインなど、研究者たちの関心はしばしば個別的であるが、本研究はアーカイヴを媒介とした専門家たちとの情報交換の機会を通じて、彼らの各々の専門領域における知見の提供を受けつつ進められ、現在に至る。

（3）本研究が戦後の「前衛」における芸術の在り方をアーカイヴとして一覧化していくプロセスの中で、そのつど対象となる個々の表現がしばしば非永続的な媒体を用いており、物理的な「作品」そのものとしては残らない事例が大多数を占めているという事実を目の当たりにした。したがって本研究が対象とする「作品」の大半は、①それが制作過程（あるいは制作の経緯、文脈）に関する情報の系列、②それが発表される特定の催事において事前に用意される情報の系列（プログラム等の催事印刷物）、③記録写真、記録映像、記録音源といった、いわば対象との直接性を媒介するメディアによって可能となる中間的系列、④当時の雑誌記事等、事後的な情報の系列、⑤オーラル・ヒストリー、といった複数の系列のレイヤーの中に、あくまでメタデータの束としてのみ残存しうるものとして扱われた。そしてこのような見解から、芸術作品を自律した単位としてではなく、「個々の特定の催事＝出来事（event）の構成要素」という単位（エフェメラルな単位）で扱うデータベースを想定し、そのようなデータベースを可能にするメタデータ・スキーマの設計・開発を進めた。「階層型データ・モデル」をベースに、「ネットワーク型データ・モデル」のロジックを局所的に援用しつつ、当該スキーマの完成度はすでに実用的なレベルにまで到達している。催事情報の試入力、スキーマの構造的な調整、属性値の配置の調整といった試行錯誤的なプロセスが繰り返し実施され、本スキーマはすでに然るべきデータベース・システムへの実装が可能なレベルにある。本スキーマの設計・開発プロセスでは、レコード間のパラディグマティックな関係（縦の関係）、すなわち、複数のレコードを貫く比較可能性の条件」を整えるプロセス（階層型データのロジック強化）にとりわけ重点が置かれた。本研究において作成されている全てのリソースの論理的構造は、概ねこのスキーマに準拠している。

（4）戦後日本、とりわけ東京を軸とする「前衛」の歴史的検証を課題としたニューヨーク近代美術館での回顧展「Tokyo 1955-1970: A New Avant-Garde」（2012 年 9 月 18 日-2013 年 2 月 25 日）の開催に伴い、本研究はその成果の一部を国際社会に広く発信するプラットフォームを得た。同展キュレーターのドリウン・チョン及び同館の研究組織 C-MAP（Contemporary and Modern Art Perspectives in a Global Age）との協働により、「ミュージアムとアーカイヴ、キュレーターとアーキヴィストの間で生じうる生産的な摩擦（productive frictions）を可視化する」という問題設定のもと、本研究の成果は同展と連動し立ち上げられた同館サブサイト『post』の主要コンテンツの一つとして採用された。2014 年 6 月現在、草月アートセンター全 305 催事、全 748 件の催事印刷物（エフェメラ類）のイメージと催事メタデータ（日本語・英語）が、然るべきインターフェイスを持つデジタル・リソースとして公開されている（http://post.at.moma.org/）。本リソースは今後も長期的なスケジュールのもとで更新され続けるが、『post』は同リソースの研究利用をインターネットという媒体において具体的に実践・提示する場として、国内外の研究者による様々なアプローチ(論考、ディスカッション、オーラル・ヒストリー等)を随時追加・発信している。また、『post』のようなプラットフォームが本研究において編成された資料体について広く周知を促している効果として、慶應義塾大学アート・センターが実践するアーカイヴ設計・構築の手法への国際的な関心が高まりを見せ、同センターのアーカイヴ施設利用者の増加に繋がっている。

(5)物理的資料体の編成プロセスと並行し、本研究ではデータベースにおいて束ねられうるレコード群の系列や、各レコードの構成要素であるメタデータ群の系列にそれぞれ与えられるべき論理的構造（メタデータ・スキーマ）の設計プロセスに重点が置かれた。「アーカイヴ」は未分化なものの分化に留まらず、分化と脱分化を交互に繰り返すかたちで資料の活性化、再活性化を目論むものでなければならない。そのような視座が、個別的・取捨選択的な「内容」よりもむしろそれらを収める「容器」の在り方とそのフォーメーション、そしてインターフェイスのデザインへと、次第に本研究の重点のシフトを促し

た。今後は本研究のプロセスを「アーカイヴ生成型」研究の作業モデルとし、芸術の歴史的モチーフを出来事＝催事の単位（作品や人物の単位を包含する単位）においてデータベース化する手法と共に、より広範囲の「前衛」を扱うメソドロジーとして進化・深化させていく必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① 上崎 千、「エフェメラと出来事の間に差し込まれた『/』の肌理について：写真の問題としてデジタル・アーカイヴを問う The Grain of Ephemera/Event: Thinking Digital Archive Through Photography」、エレナ・ストイコビッチ 編訳、ロンドン『Either/And』ウェブサイト、査読無（2013 年）、http://eitherand.org/archiving-line/grain-ephemera-event-thinking-digital-archive-thro/

② 上崎 千、「『記載の場所』を巡って：アーカイヴと横尾忠則 Around the "Places of Consignation": The Archive and Yokoo Tadanori（アーカイヴ的思考の堆積作用 Sedimentation of the Archival Mind, Part 2）」、クリストファー・スティーヴンス 訳、ニューヨーク近代美術館『post』ウェブサイト、査読無（2013 年 5 月 6 日）、http://post.at.moma.org/content_items/177-a-sedimentation-of-the-archival-mind-2

③ 上崎 千、「アーカイヴと表現：（非）物質化とデジタル化、および『隣接領域』について」、『慶應義塾大学アート・センター年報』、査読無、第 20 号（2013 年 3 月）、102-104 頁

④ 上崎 千、「草月アートセンターと印刷された問題：モヤシを貼り付けた案内状 The Sogetsu Art Center and the Matter of Printed Matter（アーカイヴ的思考の堆積作用 Sedimentation of the Archival Mind, Part 1）」、クリストファー・スティーヴンス 訳、ニューヨーク近代美術館『post』ウェブサイト、査読無（2013 年 1 月 15 日）、http://post.at.moma.org/content_items/119-a-sedimentation-of-the-archival-mind-1

⑤ 上崎 千、「（非）物質化とアーカイヴ（ephemeral/ephemera）」、ニッシャ印刷文化振興財団『AMeeT』ウェブサイト、査読無（2012 年 12 月 27 日）、http://www.ameet.jp/digital-archives/digital-archives_20121227/

⑥ 上崎 千、「『記載の場所』を巡って：アーカイヴと横尾忠則」、『ユリイカ』、査読無、第 44 巻、第 13 号（2012 年 11 月）、183-190 頁

〔学会発表〕（計 11 件）

① 上崎 千、「アーカイヴと『前衛』：表現の非永続性 ephemerality と資料体」、東京文化財研究所主催シンポジウム「アート・アーカイヴの諸相」（東京文化財研究所、2014 年 2 月 25 日）

② 上崎 千、「『欧州から愛をこめて』におけるドラマ/ドキュメンタリーの界面」、東京藝術大学芸術情報センター主催シンポジウム「思想としてのテレビ」（東京藝術大学、2013 年 12 月 21 日）

③ 蔵屋 美香、上崎 千、「アーカイブとデータベースのあいだで：慶應義塾大学アート・センターと東京国立近代美術館の試み」、上智大学大学院グローバルスタディーズ研究科主催シンポジウム（上智大学、2013 年 11 月 29 日）

④ 上崎 千、「アーカイヴと表現」、慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ総合研究センター主催シンポジウム「コンテンツとコンテクストの統合的アーカイヴィングに向けて」（慶應義塾大学、2013 年 11 月 28 日）

⑤ 三輪 健仁、森 大志郎、上崎 千、「結果とは過去である：そして、穴の底では、夢見るように」、東京国立近代美術館 60 周年記念プログラム「14 の夕べ」関連企画（東京国立近代美術館エントランスホール、2012 年 9 月 8 日）

⑥ 上崎千、「『アーカイヴ的思考』について」、京都市立芸術大学「創造のためのアーカイブ」研究会主催（京都市立芸術大学中央棟会議室、2012 年 7 月 30 日）

⑦ ドリウン・チョン、ミシェル・エリゴット、ジョン・ヘンドリックス、上崎千、「MoMA QNS Session with Sen Uesaki: Archival / Curatorial」、ニューヨーク近代美術館 C-MAP 主催シンポジウム（ニューヨーク近代美術館クイーンズ分館、2012 年 6 月 26 日）

⑧ 上崎 千、「舗装道路と中央分離帯：印刷物とアーカイヴ The Pavement and the Median Strip: Printed Matter as Archives」、ニューヨーク近代美術館 C-MAP 主催（ニューヨーク近代美術館コミッティ・ルーム、2012 年 6 月 22 日）

⑨ 上崎 千、「ライブラリアンとアーキヴィスト」、図書館総合展運営委員会主催、第 13 回図書館総合展フォーラム「『知』が拡散する時代の『公』と『私』：図書館をめぐって」（パシフィコ横浜、2011 年 11 月 10 日）

⑩ 上崎 千、「アーカイヴと芸術作品」、京都造形芸術大学主催（京都造形芸術大学外苑キャンパス、2011 年 10 月 29 日）

⑪ 上崎 千、「草月アートセンターと残りのもの：出来事、印刷物、アーカイヴ Remnants of Sogetsu Art Center（1958

-1971): Events, Printed Matter and the Archive」、ニューヨーク近代美術館主催（ニューヨーク近代美術館アトリウム、2011 年 7 月 26 日）

〔図書〕（計 3 件）

① 蔵屋 美香、林 道郎、藪前 知子、上崎 千、「可能なる美術館：コレクションとアーカイヴ」、永瀬 恭一、上田 和彦 編、『組立-転回』（組立、2014 年）、6-43 頁

② 上崎 千、「そして穴の底では、名残惜しそうに、墓掘人夫が鉗子を振るう」、東京国立近代美術館 編、『ドキュメント：14 の夕べ』（青幻舎、2013 年）、48-56 頁

③ 上崎 千、「ペイヴメント：舗装道路と印刷物（印刷された問題 printed matter）」、蔵屋 美香 編、『路上 On the Road』（東京国立近代美術館、2011 年）

６．研究組織

(1) 研究代表者

上崎 千（UESAKI, Sen）
慶應義塾大学・アート･センター・講師
研究者番号：50599462